

信州の小さな町で、非農家出身の若者たちが創業した牧場の未来

長野県小布施町 木下 荒野氏（小布施牧場株式会社）

長野県で一番面積が小さく、人口も1万人少々の小布施町。そこにUターンして出版業を営む父に、「荒野」と名付けられた木下青年。「荒野の預言者」ヨハネにちなんだのか、荒野を開拓する者たれといふとか、その名の通りに少年時代から酪農を志し、修業を積んで、故郷に「小布施牧場」を創業した。

編集の傍ら、米や栗を自家生産する父も、「取締役役員」として支援する。

小布施に根差す木下家が、家族総出の農業回帰で創業したこの「小布施牧場」は、どんな哲学で経営されるのか、そこにどんな未来が開けているのだろうか。

信州の小さな宝石 小布施町のテロワール

小布施の町がある北信濃の善光寺平は、標高400m弱の盆地だ。南

から流れ下ってきた千曲川と、西の松本方面から峡谷を抜けてきた犀川がここで合流し、信濃川となって新潟方面に向かう。合流地点の川中島も、川が盆地から北東に出ていく小布施と豊野（現長野市）の間のあたりも、歴史を通じて洪水の名所だった。戦後の治水の進展で、その脅威も忘れられがちになっていたが、2019年10月の台風19号による洪水では、北陸新幹線の長野車両基地が水没し、その対岸にある小布施町内でも50戸以上の家屋が被災した。川

に近い平地にある小布施牧場にも、浸水は及んだという。

そんな小布施町だが、中心部分には洪水の被害は及ばない。南東の草津白根山から流れ下る松川が形成した扇状地の上であって、江戸初期に築かれた千両堤で守られているからだ。大坂の陣の前に幕府から警戒され、広島50万石から当地の2万石へと改易された福島正則が、得意の築城術を治水に応用したのである。小布施牧場直営のジェラート店 Ellipse（ミルグリーン）はその堤の傍らにあつて、堤に沿った森は子牛の放牧場となっている。

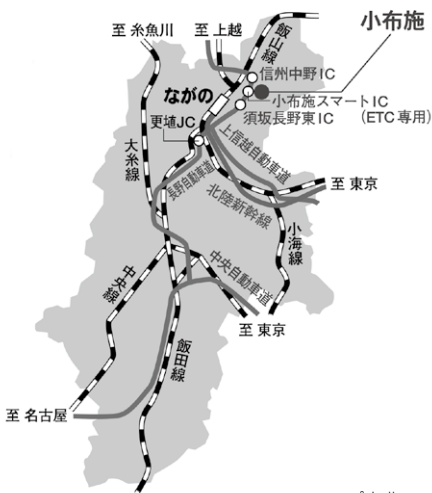
福島正則の改易転封は、堤以外にも思わぬ影響をもたらした。正則の無念が尾を引いたか、後継も早世が続いて藩が早々に断絶し、小布施一帯は天領（幕府直轄領）となったのである。天領は武士の数が少なく、参勤交代の負担などもないので、年貢が低めだ。飛騨高山や倉敷などが

木下 荒野



きのした こうや

小布施牧場株式会社代表取締役。1989年、小布施町生まれ。2011年、酪農学園大学酪農学科卒業。永井農場で3年間酪農・稲作部門を担当したのち、ニュージーランドで1年間放牧型酪農を学ぶ。スイス・イタリア遊学を経て、2017年に小布施牧場を創業した。10数頭のジャージー牛を飼育しながら、ジェラート店やチーズ工房も営んでいる。



マップ出典：小布施町「信州おぶせ」

藻谷 浩介（もたに こうすけ）

山口県生まれの56歳。（株）日本総合研究所主席研究員、一般社団法人スマート・テロワール協会理事。平成合併前の全3,200市町村、海外114カ国を自費で訪問し、地域特性を多面的に把握。2000年頃から精力的に、地域振興や人口成熟問題に関する研究・著作・講演を行なっている。著書に『デフレの正体』『里山資本主義』（共にKADOKAWA）、『世界まちかど地政学Next』（文藝春秋）など。共著に『進化する里山資本主義』（Japan Times）、『東京脱出論』（ブックマン社）。日本農業新聞のコラム「論点」に、2014年以来、年2回寄稿中。

典型だが、出入りが自由で物流の拠点ともなりやすく、商人の自治が進んで文化が栄える。小布施にも、造り酒屋を営む市村家（12代目が、晩年の葛飾北斎を迎え入れた高井鴻山）などの、有力商人が生まれた。

松川の源流の草津白根山は活火山で、山頂には酸性泉を湛えた「湯釜」がある。川の水も酸性で、そのため小布施の土壌も米作には向かない。その代わり、栗が良く実ることに気付いたのは、室町時代に丹波から移住してきた武将だったという。彼が故郷から取り寄せた丹波栗が、商売の栄えた江戸時代以降は数々の栗菓子を生み、今に至る当地の名物となっている。この土壌は、りんごやぶどう、桃、梨、さくらんぼなどの果樹栽培にも適地だ。戦前に創業した小布施ワイナリーは現在4代目だが、日本のワインで最初に、欧州で栄誉ある賞を受賞している。

自治の気風の下で 先端のまちづくり

小さいながら天領として培われた、商人による自治の気風は、町にしっかりと受け継がれている。

市村家16代の郁夫は、1969年から急逝した79年まで町長を務め、「農業立町」「文化立町」を掲げて、都市計画区域内での住宅開発と農地



小布施町。標高約400mの盆地で寒暖の差が激しい寡雨・内陸性の気候

の保全を同時に進めた。北斎の肉筆画を集めた北斎館を76年に開業させたことで、観光客も一気増加。老舗有力栗菓子店3社は、庭園を備えた物販飲食施設を競って整備した。80年代には、行政や市村家を含む6地権者が協力して中心部の修景事業を実施。観光施設や店舗が、栗の木の角材で舗装された裏路地がつながれ、町の景観レベルは一気に高まった。

2004年から20年には、郁夫の甥である市村良三が町長を務め、町民、地場企業、町外企業、研究機関や大学の4者による「四つの協働」が進められた。町民ぐるみで「花のまちづくり」を目指す中、個人の庭

の一部分を観光客にも開放する「オープンガーデン」が始まり、現在では130軒が参加している。県南が本拠の伊那食品の「かんでんぱぱ」の店など、町外企業の参画も増えた。東京理科大学、信州大学、法政大学、そして慶応大学SDM（システムデザイン・マネジメント研究科）との協働プロジェクトも始まった。当スマート・テロワール協会も、信州大学と連携して、環境省の「地域循環型共生圏つくりプラットフォーム」事業を手掛けている。木下真風・荒野兄弟の父・木下豊が当地で経営する出版社の「文屋」も、こうした各種プロジェクトの推進役の一つとなっている。

2010年代には、若者の参画促進も強く意識されるようになった。そんな中で、ボルダリングやスノーボードジャンプなどの新しいスポーツが広まり、特にスラックライン（ベルト状のラインの上を歩いたり飛んだりする綱渡りスポーツ）に関しては、地元が設けた常設施設もあって多くの若者が参加。今では小布施はその「聖地」とも言われる。

非農業者の子弟が 地縁を活かして牧場を創業

木下荒野は1989年、そんな小布施町に生まれた。隣市の須坂園芸

高校に通いながら、果樹栽培ではなく酪農に志し、北海道江別市の酪農学園大学に進学。国内の牧場で3年間修業した後、ニュージーランドで1年間就労し、放牧酪農を体験。さらにスイスやイタリアで遊学してから帰郷して、2017年に小布施牧場を創業した。本人は牛の飼育と牛乳生産を行い、帰郷して事業に参画した兄は、ホテルでの経験を活かしてジェラート作りと店舗運営を担当している。

この一連の経緯の中には、21世紀的必要要素が幾つもある。大学農学部進学や農業法人就職へのステップとしての、農業系高校の再評価。デスクワークに従事するインテリの、子弟の農業回帰。東京を経由しない、地方対地方、地方対海外の行き来の中で、若者の修業のストーリーは、イチローや大谷にも通じる。そして妻や兄弟夫婦、父との協働による家族経営。

この原稿の筆者である藻谷は、ラポ国際交流財団という公益財団法人の無給の理事なのだが、このラポという教育団体は、外国語教育や演劇教育、多世代による縦型の活動、海外ホームステイ事業などの我が国での先駆けであり、荒野も少年時には会員だったと聞いている。彼もラポの国際交流事業の中で、体当たりで

世界に出ていく素地を鍛えたのだから。
うか。

それにしても、非農家の子弟がどのようにして牧場用地や、各種機材を手当てできたのか。代々の地元出身者として地域にネットワークがあり、ちょうど廃業したばかりの牧場の中古牛舎を購入し、土地を借りて引き継いだことが大きかったという。牧場経営には、悪臭や廃棄物処理といった問題がつきまとうが、その点は配慮と対策を重ねて、近隣の信用を勝ち得た。初期投資の3分の1にあたる2450万円は、東京のエンジェル投資家2名に事業計画をプレゼンして出資を得ることができ、他は政策公庫からの借り入れで賄っている。

楽農経営という理念のトコロ 放牧酪農十六次産業

小布施牧場の掲げる経営理念は明快だ。「社員が幸せに働く楽農経営で、美しい里山を増やします」。

その下には5つの特徴がある。小規模、放牧型、地域内循環型、高品質の六次産業、そして教育と普及だ。まずは「小規模」。飼育しているのは10数頭のジャージー種だ。子牛を森の中で育てていることは述べたが、成牛についても広い牛舎の中で、ゆったりとしたストレスフリーの飼

育を行っている。最初は8頭から始め、手当の資金は400万円で済んだ。今年度からは多角化として、和牛の繁殖にも挑戦するという。

ついで「放牧型」。美しい田園景観の形成も意識しつつ、信濃川に近い遊休農地を放牧地としている。稲わらやトウモロコシ等についても、地域内での飼料自給率100%を目指す。しかし、花巻市の盛川農場のようなトウモロコシ生産農家は近隣にはなく、頭数も少ないので、トウモロコシは当面、自前での作付けにとどまっているようだ。

「地域内循環型」として手がけるのは、糞尿の近隣農家への還元だ。それ自体は酪農家の当たり前だが、善玉菌を導入して無臭化し、肥料としての性能や使い勝手を改善しているところに特徴がある。この善玉菌の活用が、近隣から苦情の出ない牧場経営にもつながっている。

そして「高品質の六次産業」。牛乳はアイスクリームなどのジェラート、プリン、そしてチーズに自社で加工し、販売している。店舗の建設と、イタリアから輸入したジェラート製造機器には、5000万円以上と初期投資の大半を投じた。農家でありながら、最初から加工と販売に投資を集中することで、売り上げを確保する戦略を取ったわけだ。

3年後の2020年には、1000万円の追加投資でチーズの生産販売を開始。プリンやモッツアレラチーズドッグも名物となった。「世界一の評価を受けます」という、志が高い目標を掲げつつ、「味わいのまち小布施の魅力を高めることで地域に貢献します」という、地域目線の方針も持っている。

近隣商圏の開拓と 同志の縁でコロナを乗り切る

小布施牧場の売り上げは、コロナ禍の2020年に、3100万円を超えた。兄弟ともに幼い子どもたちが生まれ、それぞれの妻が育児に専念する中で従業員の女性も1名雇用したが、2家族+1名の生活はじゅうぶんに成り立つレベルとなっている。

小布施町は観光地として有名だが、その集客はコロナ禍で打撃を受けた。しかし近隣商圏にも、長野市を中心に60万人以上の人口があり、そこに16万枚のチラシを打つことで、広域の住民の認知を得ることができた。2019年から良品計画に、アイスクリー

ムの卸売りを開始したことも、経営を助けた。栃木県那須町の「森林ノ牧場」が、販売枠を分けてくれたのである。この「森林ノ牧場」は、非農家の若者が創業したベンチャーで、「勤務は週休2日、9時から6時まで」という理念を掲げ、同じくジャージー種の自然放牧とアイスクリーム直売を行っている。創業直後の東日本大震災で休業を余儀なくされるなど、彼ら自身もたいへんに苦勞した経験を持つのだが、同じような経営を志す小布施牧場の支援に動いてくれたのである。

20年には、新潟県三条市に本社を持つアウトドア用品メーカーのスノーピークが、長野県白馬村に開業した体験型複合施設「Snow Peak LAND STATION HAKUBA」や、軽井沢プリンスホテルにも、ジェラ

小布施町内限定！宅配サービスのご案内
小布施牧場 しほりたてジャージー牛乳の
アイスクリーム
モッツアレラチーズ
モッツアレラチーズドッグを
出前いたします！

小布施牧場の新鮮なジャージーミルクから生まれた
ふるさとの美味を、ご家族みんなのひとときと
小布施牧場からお届けいたします

アイスクリーム 75グラム 350円	お家用アイスクリーム 400グラム 900円 宅配サービス期間限定 特別価格	モッツアレラチーズ 100グラム 800円	モッツアレラチーズドッグ 600円 新鮮なモッツアレラチーズとピザのチーズ ドッグです。お肉の代わりにお肉を 入れたままオーブンで焼くだけでお楽しみ いただけます。お肉が足りなくなりましたら 追加で追加注文ください。お楽しみ ください。100円以上のご注文が必要です。
-----------------------	---	--------------------------	---

※お値段はすべて税込、お届けは無料です！

コロナ下で配布した折込チラシ



小布施牧場直営のジェラート店milgreen (ミルグリーン)

1トの納入を始めた。
そのように先行者に支えられた小布施牧場が、第五の特徴として「教育と普及」を掲げるのも、味わい深いことだ。小布施牧場を成功させ、そのモデルを新規就農者に教育し、全国、そしてアジア諸国に発信・普及することで、全国や世界の荒れた里山を、美しい味わいの里に再生させていくという理念を持っている。自分たちが楽しんで続けることのできるビジネスモデルを確立し、全国や世界に同様のことをする仲間を増やそうとしているわけだ。自社事業の規模と売り上げの拡大こそが幸せ

であると考え、資本家的で自己拡張的な発想と、根本のところが違う。
**自分らしい人生を
楽しく生きるための農業**

戦後の工業化を経て、産業のサービシ化が極まった21世紀の日本。非農家出身の若者が農場をつくるというには、いわば一周回った原点回帰のような趣がある。

しかし彼らが目指すのは、過去にあった農業ではなく、ここから新たに始める農業だ。工業やサービス業の要素も取り入れ、自分たちが自分たちらしく楽しく生きていくために、農を核としたベンチャーを創業しているのである。

先日ネットで、ある若い女性の人生相談の記事を読んだ。「仕事が原因で鬱になってしまっって、働けなくなっってしまった。人間は働かなければ生きていく価値がないのに、今の状態では、穀潰し、人間のケースと言われても仕方ありません。」この相談者は人生のどこかの段階で、「人間は働かなければならない」という価値観を押し付けられ、それに染まって生きてきたのだろう。だがそれは裏返せば、働いていない人を、穀潰しで人間のケースであると見下す価値観でもある。その根っこには、「他人に見下されたくない」と

いう承認欲求があるのだろう。それが満たされなくなったからこそ相談しているし、自分で自分を罵ることだ。だがそうして働くのはそもそも何のためなのか。働くために働くのでは、働きバチと変わらない。他人に見下されたくないために働くというのでは、他人の目線に支配されているようなものだ。そうではなく世界の大多数の人たちは、「人生は楽しく生きるためである」と考えている。

働くことは楽しく生きるための手段の一つであり、働けなくなっったからといって、人生そのものが無価値になるわけではない。日本人の多くは、手段と目的が逆転してしまっているのだ。

これに対し、米国で普遍的な「事業は拡大せねばならない」という強迫観念は、日本でも一部のアグレッシブな事業家が共有しているものだが、「他人に見下されたくないだけでなく、むしろどんどん差を付けて行きたい」という優越欲求に発している。単なる承認欲求よりは前向きなようにも見えるが、他人に差をつけたいということはつまり、差をつけた相手を見下したいということでもある。この優越欲求に染まると、自立した人間であるようでは、見下せる相手がいないと生きていけない。

い、いわば自分より弱い者の存在に依存した、空しい人生を送ることになってしまふ。

そうではなく、豊かな令和の時代に生きる我々は、「自分の生きたい人生を、自分サイズで楽しく生きる」という目標を掲げてはどうか。自分の事業拡大よりも、同じように自分サイズで楽しく生きる人を増やしてはどうか。動物を飼う仕事であれば、飼っている動物にも楽しく生きて生死を全うさせることに、エネルギーを割いてはどうか。

そうしたビジョンを持つ人間にとって農業は、素晴らしい一生モノの仕事になりうるということを、まだ若い木下兄弟は、身をもって証明しようとしている。彼らの父が、ささやかな出版業を営みながら、晴耕雨読の人生を楽しく送ってきたように。彼らの旅は、まだ始まったばかりだ。(敬称略)

オンライン
セミナー

目指そう！我が町を
スマート・テロワールに

コメンテーター：中田康雄会長

スマート・テロワール協会ではZoomによるセミナーを毎月開催中。第6回は6月6日13時～、山形大学農学部にて2016年から5年間活動した松尾雅彦の寄付講座「スマート・テロワール形成講座」の報告会を行う。参加費1000円(税込み、協会員は無料)。申し込みはst66@nagai-inc.onlineに空メール送信(電話会社のアドレスからは不可、G-mailなどはOK)。

写真提供：小布施牧場(株)